

賴原退藏石作乘

卷九



頑原退藏著作集

第十九卷

額原退藏著作集 第十九卷

定價 四八〇〇円

昭和五十五年十二月一日印刷
昭和五十五年十二月十日発行

著 者 額原退藏

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

T 104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三―四

©一九八〇 検印廃止

目次

和露文庫俳書目

五

索引

四七

後記

五三

俳諧書誌

和露文庫俳書目

序

書を蔵する者必しも書を読まず。その読まざるやなほよし。之を吝んで人に示さざるあり。此の如くれば二酉の富といへども何する所ぞ。財を蓄ふるはよく之を散ぜんが為なり。書を積むは即ちよく之を用ひんが為ならざるべからず。和露川西氏は俳書の蒐集愛蔵を以て聞ゆ。しかも吝んで之を他に示さるにあらず。十襲珍蔵するものと雖も、学徒の為に喜んでその秘庫を開く。而して又汗牛充棟の書悉くその手沢存せざるはなし。氏の如きは誠によく書を蔵し書を愛するものといふべきなり。嚮に私財を投じて奇観の珍籍を覆刻上梓し、以て学者の渴望を医すること尠からず。今また自らその文庫を整理し俳書目録を作製して本誌にその一部を公開せんとす。蓋し研究者に便する所鮮からざるべし。氏痼疾あり、時として筆硯に親しむ能はざる時あれば、予即ち微力を揣らず、一臂の力を致さんとす。為に序する事然り。

例言

一、本書目は手当り次第気まかせにノートして行くので解題の精疎繁簡一ならず且つ順次配列頗る不体裁で誠に心苦しいが尚引つづいて蒐集中でもあり、獲るに従つて録したい欲もあるので、諒恕を願ふより外はない。

一、他日纏めて整理するやうな場合は、先づ年代順に配して、別に五十音列、類書分、編者別等の索引を附したいと思ふ。

一、書物の形状、大は大本、半は半紙本、中は中本、横は横本、三は三つ切、小は小本、寸は寸珍、豆は豆本、写は写本の略。

一、書物の題簽剝落して掲り処なきものは仮に外題を附し、又刊行年代の不明なるものは推定に止める場合が少くない。大方の示教を給はりたい。

〔編者注〕 一、和露文庫のほとんどの俳書が、現在天理図書館綿屋文庫に収められてある。よって利用の便を計り、同文庫の請求記号を各俳書の解説の終りに記した。和露文庫本は、その記号を（ ）で示し、和露文庫本以外の俳書と取り合せになっている場合は、*印を付した。また本書記載の俳書で綿屋文庫に収められていないものについても、綿屋文庫の同種俳書の請求記号を示し、「」を用いて区別した。

一、『綿屋文庫連歌俳諧諸書目録』と書名が異なる場合、請求記号の次にその旨を註記した。

発句帳 大四冊

兼載・宗祇・宗碩・宗教・周桂・昌叱・昌休・宗養・紹巴・肖柏・玄仍・心敬・専順・行助・賢盛等の発句を四季類題別にし、
て輯めたるもの。序跋・刊行年月等すべて無ければ編者・出版
年代を詳にしがたけれど、本文庫本は平仮名古活字本にして、
遅くとも元和年代までの刊行と思はる。阿誰軒の目録に立圍の
撰とせる『発句帳』は別種のものなるべし。但し本書異版多け
れば後に立圍などの序を加へて刊行せしものか。なほ考ふべし。
(れ2・212)

紹巴発句帳 横一冊

紹巴の発句を四季類題別に編纂せるものにして、撰者・刊行年
月を明かにせざれども、恐らくは寛永年間の出版ならんか。連
歌の書に属すべきものなれども、その発句帳たるが故に姑く本
目録中に加ふ。(れ3・218)

匠材集 横二冊 紹巴跋 慶長二年三月上旬(跋)

連歌の用語をいろは順に集めて説明を加へたるもの。序に「上
古の先達も今の世にも詞材をあつめて匠の墨繩にあてゝわづら
はしきふしをけつり正風にきすべし。此故にこれを匠材集と名
付侍る也」といへり。此の書異版・後刷多けれども、本文庫本
は平仮名古活字本にして、蓋し刊行最も早きものたるべし。
(れ1・1151)

石鼎集 横二冊 梅村弥白寿梓

上巻は和漢聯句にて、明応八年三月四日会夢窓国師以下の人々
の聯句を和漢の濫觴として掲げ、元和八年十一月二十三日専益
宅に於ける昌琢等の聯句まで百韻十一巻を載す。下巻は漢和聯

句にて永禄十二年五月十三日の策彦・紹巴両吟百韻以下百韻八
巻を収む。純粹の俳書にはあらざれども俳諧の和漢・漢和の研
究上資する所大なり。(れ616)

玉櫛寄 中一冊 池田是誰 寛文二壬寅曆二月吉祥日 中

野太郎左衛門開板

寛文元年に自ら撰べる附合集『初本結』の附録にして、題簽に
も「玉櫛笥初本結附録」と記せり。俳諧の流の事、心と身とを
俳諧になすべき事、歌道の心得必要な事、ぬるき句・はまる
句の事等以下俳諧の作法につきて説けり。その説概して穩健に
して著者の識見をうかがふに足る。終に自らの発句五十句を記
せり。(お36116)

幅紗物 横一冊 自序 棕梨一雪 寛文三癸卯歳八月吉辰

『正章千句』に対する批言『茶杓竹』の追加にして巻頭に「追
加幅紗物」と題し、丁附にも「追加」の如く記せり。題号は
茶杓には服紗を添へて見るものなれば名づけたるよし序文に見
ゆ。『玉海集』『紅梅千句』等の中に見ゆる貞室の句を非難し、
その他種々の例をあげて貞室を悪評せるものにして、当時多く
の論戦書に見る如く、殆ど愚口難言を極めたり。著者は明記せ
ざれども阿誰軒の目録に一雪の作とせり。(＊お3718 茶杓竹)

牛刀每公編 横合一冊 自序 季吟序 寛文十二年 長尾平兵衛

開刊

漢和・和漢の俳諧百韻十二巻に漢のみの聯句百韻一卷、和のみの
聯句百韻一卷を追加し、合計千四百韻の独吟を収む。題名の
牛刀は論語の語に由り、每公は梅松の分子たること題号之説に
自ら述べ、毎巻梅と松とを以て首唱とせり。例へば「飛は梅ハ

鷗スノ定宿」「人ヲ涼スル松モ木葉」等の句を以て巻き起すの類なり。季吟の序に「此狂句之千四百韻は忍やまの山人の独吟とかや」とあれども忍山の山人の何人なるかを明かにせず。恐らく季吟門人なるべし。(お46—10)

あふらかす 横一冊 松永貞徳 寛永二十年

『大筑波集』の附合の前句をとりて、之に貞徳自ら附句を試み以て附合の範を示したるもの。例へば『大筑波』に「霞の衣裾は濡れけり」を前句として「佐保姫の春立ちながらしとをして」と附けたるに對し、貞徳は「天人やあまくだるらし春の海」などと附けて所謂貞徳風の附け方を示せり。次の『淀川』及び『御傘』と共に貞徳三部の書と称せられ、貞門俳諧の本領を知らんには必読の書なり。なほ本書には終に俳諧式目十ヶ条を和歌に詠じたるものを添ふ。「油糟」の題名は宗鑑が山崎にて油売を営めりといふ伝説によりて名づけしなり。柱に「新」とあり。蓋し『淀川』と共に『新增大筑波』の一部をなせるなり。(お11—5)

よと河 横一冊 自跋 松永貞徳 寛永二十年 二条寺町

野田弥兵衛開板

一名『新增大筑波集』。『大筑波集』の附句を前句として貞徳自ら之に第三句を附け試み、且つ『大筑波』の附句を批評し自己の附句に説明を加へて作り物・同意・用附・俳言無き句等のことにつきて説けり。「よと河」の名は自ら跋に「山崎のそばを通りて行末は海に出づれば此の本は淀川と名づけ侍る」といへる如く、『油糟』と共に宗鑑に因みて号したるなり。『御傘』『油糟』と共に貞門俳諧研究上最も重要な俳書なり。柱に「新下」

とあり、「新增大筑波下」の意。(お11—3)

俳諧或問 中一冊 脩竹堂 (延宝六戊午八月江戸芝神明前御沢九兵衛板)

談林派の俳論なり。巻頭に守武の画像あり。内容は俳諧の起源変遷より貞門談林の俳風に至るまでを問答体に論じたるものにして、その中に一時軒を推重する事多く、且つ引用せる句の作者が中国地方に多きと、巻頭に「脩竹堂の主人といふ者有り、関西より来て東武のかたはらに僑居す」などあるより案すれば一時軒一派の人の著なるべし。本文庫下巻を欠きたれど、俳論は概ね上巻に尽き、下巻は談林派俳人の附句と、一時軒の独吟に宗因の点したるものとを載す。(お53—13)

談林俳諧批判 中二冊

巻頭には「俳諧略」と題せり。上巻は『俳諧或問』にあげたる発句を非難して談林の俳風を攻撃せるもの。下巻は俳諧の二字の事、六義之事、発句・脇、第三の仕様の事、発句切字の事等につきて説き、『俳諧或問』を難する所また多し。所説徒らに先例を引き出所に泥み、陳套たるを免れず。著者を明かにせざれども貞室などの門に出でたるもの如し。刊行年月また詳ならず。(お56—10)

紅梅千句 横一冊 北村季吟跋 明暦元年乙未五月吉日

敦賀屋久兵衛開板

貞徳・友仙・正章・季吟・安静・可頼・政信・長久等の俳諧百韻十巻・追加一卷を集めしものにして、題号は巻頭の長頭丸の「紅梅やかの銀公のからころも」の発句により。季吟の跋によれば、この書は友仙の催しにかかれるものにして、之を正章清書して版行せるものなりと。貞門俳諧集として最も代表的な

るものなるべし。(お27—1)

儒諧諸百韻 横一冊 自序 徳山幽竹 延宝五丁巳歲秋八

月庚申日 堤六左衛門

句毎に儒學に關する語を賦したる百韻一卷なり。例へば「見付たり太極無極秋の風、一物あれば一物の露、天の命則月の影更て」の如し。著者は奥州会津住芳雪軒徳山氏幽竹子なる事自序に見ゆれども、その俳統等詳にせず。(お52—20)

俳諧千句 横二冊 長頭丸興 安原貞室 貞徳点 慶安元

年仲冬吉日刊

世に所謂「正章千句」なり。巻頭には「千句独吟之俳諧」と記せり。正章の独吟千句及び追加一卷に、その師貞徳が点をかけ批言を加へたるものにして、貞徳の俳風を知らんとするには最も恰好なり。(お18—7)

肩入事公 横二冊 自序 肥後隈本住三衆 延宝五年三月

祥日(序)

序文によれば編者が延宝三年來主用にて京都滞在中、俳諧修行のため季吟の『花千句』をとりて諸家にその点を乞ひたるものを、帰國に際し置土産として残せるものなりと。『花千句』に、維舟・西武・梅盛・玖也・令徳・意朔・是誰・胤及・任口・一雪・貞恕の諸家が、点をかけ批言を加へたるものなり。この書阿誰軒の目録には「一雪の撰とし一に三衆の撰なりとしたるを見れば、一雪の撰として伝へたるものもありと覺し。本文庫本によれば正しく三衆の撰と見ゆ。(お52—1)

新続大筑波集 中十冊 北村季吟 (万治三年正月十五日)

『大筑波集』にならひて附句を四季以下に類別して集め、更に

卷十以下は発句を類別して集めたり。作者は守武より當時の八人に至るまで七百二十七人、国数四十六ヶ国に亘り、句数は附句千三百三十九句、発句三千三百三十句に及ぶ一大編集たり。本文庫本奥附を欠く。依て刊行年代は阿誰軒の目録に従へり。(お41—10)

狗猫集

横五冊 自序 松江重頼 寛永十年一月成(序)

『守武千句』『大筑波集』に入りたるは除き、その後の発句・附句の宜しきを書集め、或る古老(貞徳をさせるならん)の問を乞ひ、用捨の詞を加へて一集とせるよし、その自序に見ゆ。寛永八年二月に業を始めて同十年睦月半に記し終れりと。『犬子集』の名は『大筑波』を慕ひて名づけたるなり。貞徳・徳元・正友・玄札・望一・正章・西武・重頼・良徳・親重等の発句千五百二十八句を一、二兩冊に収め以下附合の句又千余句を掲ぐ。貞門の句集として最も先に出て、しかもその作者の範圍の広き、句数の豊富なる、まさに貞門を代表するものといふべし。なほ本文庫には後刷とおぼしき別版の『狗猫集』あり。(お13—3)

俳諧初學抄

横一冊 自跋 斎藤徳元 寛永十八曆正月廿五日(跋)

徳元が君命を承けて俳諧の式目につきて記せるものにして、江戸に於ける俳書梓行の権輿たり。先づ俳諧の連歌にまされる衆しみ五ヶ条、新式和漢の条目、その他一般の式目を述べ、次に四季の詞、恋の詞等を集めたり。書中連歌を能に、俳諧を狂言にたとえて、狂言たりといへども当世はやるかぶきの座の狂言などは本の道にあらずと論じ、一句の仕立様肝要なるを説きて修辭の一端にふれたる所説などあり。されど大要は季寄を主と

したり。(わ9-1)

鷹筑波集

横五冊

寛永十五年五月二十五日

長頭丸跋

山本

西武

寛永十九初秋

二条寺町野田弥兵衛開板

貞徳が三十年來見及びし諸家の発句・附句を、西武にあつらへて集め編せしめしものにして、その功を急ぐため部立を分たず闇取に次第を定めたりといへり。されば体裁整然たらざれども、また貞門句集の代表的なるものの一たりといふべし。た、か、つ、く、は、の五冊に分ち、各冊題簽を「太哥観句葉」などの如く記せり。(わ10-3)

誹諧用意風体

横一冊

北村季吟

延宝元年冬至日識

巻頭には「続連珠誹諧用意問答」とありて、季吟が『続連珠』を撰するに先だち、『源氏物語』『枕草子』等の古典の註釈を試みし所以を説き、俳諧に歌道の造詣が必要なる事等を問答体にて述べたり。要するに『続連珠』撰集につきてその撰句の方針を明かにしたるものといふべく、俳諧もまた風雅の一なれば、歌道に基くべき事をその主眼とせり。柱には「続連珠風体」とあり。(わ51-13 続連珠)

伊勢宮詣

半一冊

中田心友

延宝七己未年初春旦(奥)

足代弘氏・弘員・中田心友・高向光如・竜閑快・谷貞俱等神風館一派の人々の百韻四巻を載す。中に光如・心友の両吟百韻に弘氏が批点を加へたるもの一巻あり。撰者の名を明記せざれども諸書に心友の撰とせるに従ふべし。(わ54-14)

俳諧四国猿

半一冊

春江瀬人寂甫序
因水居士跋

阿州琴枝亭律友

元禄

四竜集

京寺町二条上ル町井筒屋重勝板

律友と万海・才磨・鋤立・西鶴等との両吟連句、その他諸家の

連句・発句を集めたるものにして、集中の作者は阿波の人最も多く、その他西鶴・才磨・言水・信徳・因水・万海・轍士・我黒・只丸・和及等知名の作者少からず。(わ69-35)

万句短尺集

横一冊

鶴天甫徑菊序

岸本和英 (宝永五年)

壺枕斎和英が宝永戊子の年二月万句興行を発起し、同年四月二十五日を初会として其年の冬満足し、更にその追加一万余句を得たるを以て、之を上梓したるものなり。巻頭の一巻は百韻全部をのせたれども、他はすべて省略に従ひ、多くは一巻の第三までを採録せり。句主には調和・和英・言水・桃翁・白峰・和推・子英・調柯・沾洲・一峰等あり。(わ87-1)

名むかしの水

半一冊

古梅園長江序、自序
湛々翁(来山)跋

京都椿井町御

墨所松井和泉掾 正徳五未年仲冬上旬(跋)

京六角通御幸

町西江入町小河書林等
奈良の墨師古梅園が当時の俳士名家に乞うて、墨に関する発句を集めたるものにして、一種の広告たりしものなるべし。「石摺に梅の香高し唐やまと 露沾」「しら／＼しらけし花や墨のもと 素堂」「花と見ておられぬ水に石の雲 鬼貫」等をはじめ、沾徳・雲鼓・言水・晩山・吾仲・雲鈴・才磨等の句あり。巻末に古梅園の墨譜を添ふ。(わ95-4)

誹諧何枕

半一冊

自序

岡田如塊

宝永二乙酉歲春(序)

京井筒屋庄兵衛板

才磨・一礼・伴自・海音・東行・八虹・蘭芝・可碩・如雲・如塊等の発句・連句を四季別に集めたるもの。撰者は自序に浪花逸士とある外知る所なし。(わ89-19)

誹諧江戸弁慶

半一冊

池西言水

(延宝八年)

風虎・露沾・幽山・素堂・才丸・言水等を始め諸家の発句を四季類題別に集めたり。言水が江戸在住中編せるものにして、『江戸新道』『江戸広小路』『江戸蛇之鮓』等と姉妹篇をなすべきものなり。本文庫本刊行年月を記さず、諸本皆然るかを知らず。今諸書に延宝八年刊とせるに従ふ。(お55-54)

俳 七百五十鈞 半一冊 青木春澄序 伊藤信徳 延宝九辛酉

歳青陽吉旦 京極二条上ル町板行

信徳・如風・春澄・政定・仙庵・常之・正長・如泉、八人の百韻七巻と五十韻一巻、即ち合計七百五十韻を集めしものにして、この頃の京都の俳風を見るには最も恰好の書たるべし。阿誰軒の目録に、信徳、如泉、春澄の作とせり。(お57-14)

山の井 横合一冊 北村季吟 慶安元戊子曆南呂吉日 重

開板

初め四巻は四季の季題をあげて、その異名を記し、季題の説明と共に作句上の心得となるべき点をも説き、貞徳・貞室二家の句帳及び当時の有名なる発句集より例句を引きて之を掲げたり。終の一巻は「年中日々之発句」と題し、正月元日より十二月まで殆ど毎日作れる自句を月日の順にのす。題号につきてはその最後の句の前書(自跋と見るべきもの)に「おのれが浅き心にまかせたれば山の井とつけよといへり」といへり。この前書によれば、本書は師貞徳の閨を経たるものの如し。此の書広く世に行はれ、増・統・増統等の書も出でたり。本文庫本は慶安の再刻本なり。(お18-10)

守武千句 横一冊 自跋 荒木田守武 慶安五年孟夏良辰

野田弥兵衛開之

題簽を欠く。巻頭には「俳諧之連歌独吟千句」と題せり。守武の独吟千句にして「とひ梅やかろくしくも神の春」を発句とせる一巻に始まり、「天文九年しくれふころ」を挙句とせる追加五十韻一巻に終る。さればこの千句は天文九年十月に成れること明かなり。跋文によれば守武かつて独吟千句の立願あり、うちまぎれてそのまま過しけるもそら恐しくて、遂に闇をとりて占ひ千句を成就せりと。なほこの刊本は守武自筆の正本を以て写せる旨、巻末に附記せり。(お23-11)

俳諧御筆 横十冊 自序 松永貞徳 万治二己亥年仲秋吉辰

辰 洛陽寺町誓願寺前安田十兵衛開板

俳諧に用ふる詞をいろは順に列挙して、指合・去嫌をとけるものなり。貞徳三部書の一として古来俳道に携はる人々必読の書とせられ後刷の書も多し。万治の版も再刻などなるべく、はやく慶安四年七月刊行のものあり。書名は「上さまの御からかさは天が下にさしあひならず」との義にとり、読むにはききよきに從つて御さんと名付くる旨序文に見えたり。(お32-15)

言葉よせ 横二冊 立圃 寺町二条上ル町重徳板行

和歌の詞をいろは順に集めて簡單なる解釈を施ししもの。一種の雅言辞書にして、国語資料として見るべし。元禄の「広益書箱目録」に七冊とあれば本文庫本は後合冊したるものなるべし。(お43-8-12 大和の糸)

便船集 横七冊 自序 高瀬梅盛 寛文九己酉年孟春日

(奥)

序文に「初学のよすかには如渡得船ともならんかしとて、付合の良材を筆の林より伐出し、硯の海にすりなかつるも此便船の

大まはしにもつかん事しか也」といへる如く、附合の題材を
いはは順に列挙して、各題材下に之に關係ある語句を集めて作
句上の便に資せり。例へば、

鯛 田作 節分 松浦 宇和島 丹後 雲

などの如し。なほ終に四季の詞、非季の詞、恋の詞を添ふ。

(わ3—1)

譜類船集 横八冊 自序 高瀬梅盛 延宝四丙辰臘月上旬

寺町二条上ル町寺田与平治板行

『便船集』の増補とも見るべきものにして、各題材の条下にこ
れと關聯せる語句を集めたるのみならず、題材に関する事項を
綴り合せる短文をそへたり。この文章は、『山の井』中の文
章などと共に俳文の沿革を討める上には留意すべきものなるべ
し。その体裁の一例をあぐれば、

鯛 節分 鯛 雲 田作 宇和島 鯛の頭も信心からと世俗
丹後 松浦 伊勢の海 格 鯛の頭も信心からと世俗

の詞に云ならはせり。泉式部かいはしを石清水によせて詠た
る歌さるけんしに書たり。

阿誰軒の目錄に作者を重徳とせるは誤なるべし。なほ巻末に延
宝四年十二月刊行としたれども、序文に「延宝五初春中の十
日」とあれば、実は翌年正月に至りて初めて発兌せられしもの
なるべし。(わ52—3)

新独吟集 横二冊 寺田重徳 寛文十一歳林鐘仲旬 寺田

与平次板行

上巻には兼載・由己・貞徳・慶友・重頼・三思・正章・季吟・
徳元・空存の十家、下巻には望一・常辰・喜雲・不存・清長・
未及・不雪・友和・蟻足・休甫の十家、合二十人の百韻一卷づ

つを取めたり。書中編者の名を記さざれども阿誰軒の目錄に重
徳編とせり。重徳はこれよりさき『独吟集』二冊、『続独吟集』
二冊の編あり。よつて本書に冠するに新を以てせるにて、つい
で延宝三年また『新続独吟集』二冊を編せり。(わ45—7)

大井川集 写横合 一冊 自序 松江維舟 延宝貳甲寅年五

月廿八日(奥)

次の『藤枝集』と共に一部をなすものにして、阿誰軒の目錄に
は「大井川・藤枝四冊」とせり。内容は四季類題発句集にして、
句数一千百九十二句、作者二百七十八人に及べり。作者中主な
るものには元好・春澄・随流・釈任口・宗因・宗旦・風虎等あ
り(本写本は延宝二年陽月十一日の識語ありて、集中作者の一
人たる大和郡山の住、上田宜水が病余閑中に筆写せしものなり。
『藤枝集』春部と共に合一冊とせり)。(わ49—12)

藤枝集 横一冊 松江維舟 延宝二年五月二十八日成(巻

維舟の発句四百八十句を四季類題別に集めしものにして、『大
井川』と共に一部を成す。巻末に寛文十二年歳旦の維舟・重
昌・宗隆の三つ物、延宝二年歳旦の維舟・元好・宗隆の三つ物、
及び維舟の追加発句を添ふ。版下は維舟の自筆にして終に「延
宝貳甲寅年五月廿八日染老筆畢 松江維舟」と記せり。(わ49
—13)

大坂独吟集 横二冊 西山宗因判 延宝三乙卯歲初夏仲日

板行 村上平樂寺

上巻に幾音・素玄・三品・意樂・鶴永(西鶴の前名)、下巻に
由平・未学・悦春・重安の各独吟百韻をのせ、之に宗因が点を
かけ評言を加へたるもの。(わ50—13)

季吟廿会集 横二冊 北村季吟 延宝四丙辰曆三月吉祥日

四条立売東町中村七兵衛開板

万治二年より延宝三年に至るまでの間に季吟が一座せし俳諧百

韻二十巻を集めしものにして、終に独吟百韻二巻を添ふ。寛文

五年の『季吟十会集』の続篇と見るべきものなり。(わ51-9)

俳諧三ツ物揃 横一冊 延宝六戊午年正月吉辰 井筒屋庄

兵衛板

延宝六年歳旦に井筒屋より版行せる諸家の三ツ物を集めたるもの

の。丁附もなく各丁毎に「三ツ物所庄兵衛板」「寺町通二条上

ル町いつゝや庄兵衛板」等と記し、且つ巻頭外題の下に「次第

不同」とあれば、書肆が自家版行の三ツ物をそのまま一冊にま

とめて別に売出ししものなるべし。西武・梅盛・季吟・友静・

高政・常矩・似船・随流・令徳等当時京阪地方の名家を網羅せ

り。(わ53-29)

誹諧破邪顯正

吉日(奥)

半一冊 中島随流 延宝己未(七年)十二月

惣本寺高政の編せる『誹諧中庸姿』(延宝七年九月刊)の難書

にして貞門・談林論争書中最も著名なるものの一なり。この書

出でてより『破邪顯正返答』『猿とりもち(破邪顯正再返答)』

『二ツ盆』『綾巻』『頼政』『熊坂』等相ついで出で論難攻撃互に

努めたり。本書は巻頭まづ縷々として談林の新俗下劣にして奇

矯なるを難じ「惣別宗因と云ふせ入道第一紅毛流の張本也」と

貶し、遂には高政のことを「末代の人畜としてかゝる悪言をお

かして其身無事ならんや、あまりの悪人なれば当罰いたたあら

はれす命なかふしてかれか生恥をさらさんを見給へ」とまで罵

れり。次に『中庸姿』の一句一句につきて完膚なきまでに非難

を加へたり。(わ54-37)

誹諧破邪顯正返答 半一冊 岡西惟中 延宝庚申(八年)二

月日 書林愚常開板

随流の『破邪顯正』に対する弁駁にして、高政が惣本寺と号す

の不当ならざる所以を説き、談林末輩の弊を以て直ちにその

師宗因を責むべからざるを論じたり。さすがは梅翁門中第一の

學者だけありて、談林末流の欠点は欠点として之を認め、比較

的条理整然として論駁せり。終に「短冊の旗管城の固前は花」

を発句とせる独吟百韻一卷を添ふ。蓋し以て談林俳諧の範を示

すの意たるべし。随流は之に對し又『猿とりもち』を出して答

へ、且この独吟にも一々非難を加へたり。(わ55-26)

誹諧頼政

半一冊 延宝八年如月上旬(奥)

題簽外題の下に「破邪顯正熊坂／両書返答前書」と記せる如く、

随流の『破邪顯正』と維舟の『誹諧熊坂』とに對する返答書な

り。しかもその論駁の根拠頗る薄弱にして、只漫然と古流を罵

り随流、維舟の悪口をいふに止まれり。奥書に「梅翁門弟某」

とあるのみにて、著者の名を明かにせず。この書と全く同時に

前出惟中の『返答』出でたるを思へば、當時宗因門の人々争つ

て貞門の古老に応戦したりしならん。体裁謡曲頼政の章句に擬

し、墨譜までも施せり。蓋し熊坂の体にならひしなるべし。

(わ55-27)

投 盆

横一冊 自序 柏雨軒一札 延宝八庚申年九月吉

日 大坂呉服町書林深江屋太郎兵衛板

酒俳の二つを楽しみとするまに、酒に関する花十句を発句と

して、一日千句の独吟をなしたるものにして、題号につきては

「これ酔中^{よひ}のあた言にして衆人の目を留へきものにあらざれば
投盆と名付るものなり」と自序にいへり。(お55—39)

俳 枕 續卷二冊 山口素堂序 高野幽山 延宝八年(序)

幽山煙霞の癖ありて東は白川の関を越え西は紫陽の地を極む。

よつてその一見したる所々の句を汎く集めて編したるものにして、上巻には山城以下国別に維舟・梅翁・風虎等諸家の句及び自句をあげ、下巻には撰者が旅中得たる宮城野の萩茅、実方が塚の薄等に関する諸家の句を集む。終に梅翁・露沾等の名所俳諧の歌仙數巻をのす。刊行年月を記さざれども、素堂の序文に「寛文のころ桜木にあらはすへきをさはりおほきあしまの蟹のよこ道にまづはれ延る宝の八ツの年漸こと成ぬ」とあれば、この年の刊行なるべし。(お55—36)

毛吹草 横合一冊 自序 松江重頼 正保二年二月 三条

寺町本能寺前助左衛門開板

自序に「抑此度書集ける其品多し。先句牀のそれ々、指合のあらまし、次には四季の詞、恋の詞、同連歌の詞も追加しけるは今めかしき事也。扱又世話の詞は俳言の種にもならんやいなや、あらぬ事迄拾集て是をつがはす。まして諸国の名物付合等にも放埒の類多し。皆用捨有べき事にぞ、発句付句は才子集の以後人の語きかせる爰かしこの句子が愚なるをもあまた入申侍」とあるにその内容はほぼ知るを得べし。立圃の『花火草』と共に貞門の俳式を説ける代表的のものとして知らる。発句の作者は二百六十人、句數二千句に及び重頼・正章・重方・宗房(芭蕉とは別人)・一正・弘永・光有・徳元等の句多し。

(お14—1)

俳諧内實紀行 半一冊 自序 重虹堂風瀑 貞享三曆林鐘

中旬 皇都書林西村嘯松子粹行・江戸神田新草屋町同梅風軒

貞享三年春、風瀑江戸より伊勢度会に帰省せんとて、まづ芭蕉庵を訪ひ、虚洞亭に会し、それより虚洞・翠藏・一掬等に見送られて東海道を経て二見に至るまでの紀行文なり。巻末に京より伊勢に詣でたる一品の跋ありて、風瀑・一品の両吟歌仙一卷及び風瀑・嵐朝・一品の三吟歌仙一卷を添ふ。(お63—2)

追善九百韻 横一冊 野々口立圃 寛永十四年正月晦日

立圃の独吟百韻九巻を収む。各巻頭の発句は「雪と消し跡のひかりや弥陀如来」の如くすべて追悼の意を含めるものにして何人かの追善として興行せるものなるべし。本文庫本終數丁を欠く。よつて刊行年月は阿誰軒の俳書目錄に従ひて記せり。(お5—1)

俳諧之註 大一冊 自跋 安原正章 寛永十九年壬午仲春

下句(跋)

巻頭には「俳諧百韻之抄」とあり。阿誰軒の目錄に所謂「百韻自註」にして、「葉は花の台にのほれ仏の坐」を発句とせる貞室の百韻一卷に自ら註を加へたるものなり。右の一卷は貞室の先妣の追善の為に思ひ立ちしものなるが、初学の人々に懇望せられて愚意を書付けて註する由にいへり。作法上の事に關したる説もあれど、多くは句中の典故故事等につきて説けり。(お10—4)

口真似草

中零四冊 自序、高梨氏 高瀬梅盛 明暦貳年丙
丈菴野也跋